

岡山発 世界標準

ジャパン・ジーンズの新潮流

●○○●

大正紡績は岡山のデニムを支える立役者の一角だ。大手デニムメーカーとは一線を画す個性的な生地屋に、他にない糸をどんどん供給していく。まさに多品種小ロット。

その違いは畑までさかのぼることができる。欧米の有力ブランドからも問い合わせの絶えない糸作りが、新たなデニムを生み出す。

「技術はどこも一緒ですよ」とは、大正紡績の名物部長、近藤健一取締

●大正紡績

役。かつて日本の10大紡績と言われた紡績の技術に優劣などない。今、違いが出るのは、「原料の差」と言い切る。日本の綿糸はアメリカやオーストラリアなどの綿花をブレンドして作る。その中で、同社の親会社であるクラボウは、単一綿混」という手法で原産地



を一つにした物作りに特徴がある。

大正紡績の場合はさらに、綿に限らずに原料を世界中で探し、近藤さん

自らの目で確かめる。より良い商品のため、原料を吟味する。近藤さんの手元には、数十カ国の農家との商談の記録があ

る。作付け面積から、綿花やウールの種類、その量や買い付け価格などが一目で分かる。技術者として実際に自らが農家や

糸が違ろ、畑から違ろ

オーガニック超長綿は全て手の内。日本の葛から手積み風糸まで、素材の開発に終わりはない。

牧場主を訪ね、前払いした証でもある。「顔が見えるから、農家も真剣に作ってくれるんです」。その結果、量の多寡に関わらず、出来高の残りが他に回る。希少な原料ほど、大正紡績の優位性が高まる構図だ。

この手法で、オーガニック・コットンも日本の輸入量の90%を占めるようになった。今秋には、アフリカ大陸南東のマダガスカル産のしなやかな綿を使ったデニムを、初めて岡山の古河織物などから誕生させる。